



第1部

甲府市の

概要と

文化財の

特徴

新井 藤 記



御休泊所

大黒屋



曽根丘陵から甲府盆地を望む

甲府市は盆地内の平坦地に市街地が広がり、市の南北は丘陵地帯・山間部となる。こうした特徴ある地形が、地域ごとの多様な歴史文化を生み出している。

1. 位置

本市は山梨県の中央を南北に貫くように位置し（図2-1）、東西 23.1km、南北 41.6kmと南北に長く伸びています。市域の総面積は 212.47km² であり、山梨県の総面積の約 5% を占めます。

市域は、南北は山々に挟まれ、そのあいだに甲府盆地内の平野が広がっています（図2-2）。

市の北部は金峰山や国師岳などの秩父山地が広がり、これらのエリアは秩父多摩甲斐国立公園への指定や甲武信ユネスコエコパークへの登録がされています。また、本市を代表する観光資源のひとつである御岳昇仙峡（国特別名勝）もこのエリアに含まれます。他方、市の南部は、弥生時代～古墳時代の遺跡が多く立地している曽根丘陵よりも南側は山間部となり、黒岳や王岳など御坂山地の山々が広がっています。

市の北縁は朝日岳から大弛峠までの稜線、南縁は王岳の稜線であり、市内の標高最高地点は長野県との県境にある金峰山（2,599m）です。対して、最低地点は笛吹川に沿った大津町の 250m であることから、市内でも 2,300m 程度の標高差があります。

また、本市は、甲州道中、中道往還、御嶽道などの往還を通じて、古来から人と物の行き来が盛んでした。現在も、笛吹市、甲斐市、中央市、北杜市、山梨市、富士河口湖町、昭和町、市川三郷町、長野県川上村といった多くの市町村と隣接し、山梨県の中心都市として県内の生活・経済・産業・文化等を支えています。

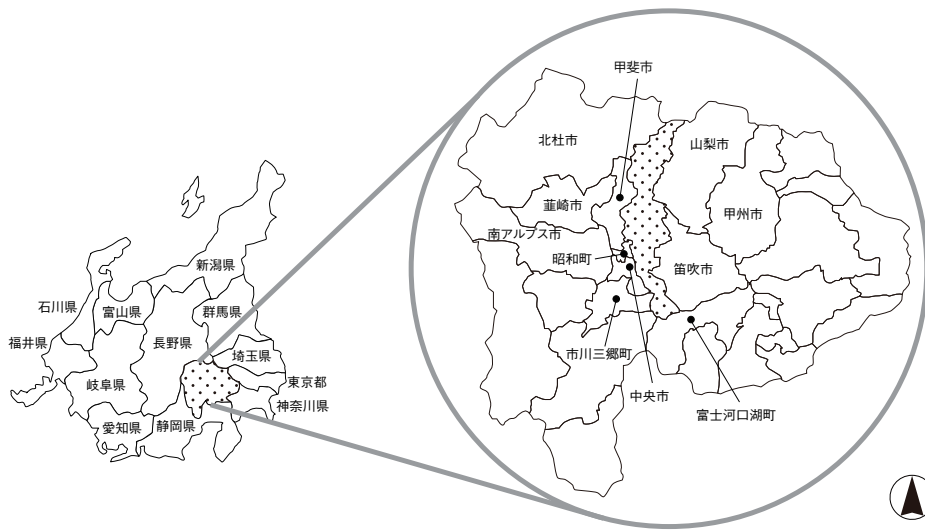


図 2-1 甲府市の位置

2. 自然的基盤

(1) 地形・地質

すでに述べたように、市域の地形は、①荒川の上流域である険しい北部の山地（秩父山地）、②市街地の広がる平坦な低地、③南部の御坂山地に分けられます。

北部山地は、およそ 6,500 万年以前に海底で堆積した岩石の上に、2,300 万年前頃に貫入した花崗岩類が広がり、その上に 200 万年前の水ヶ森火山や黒富士火山から噴出した火砕岩類が厚く覆っています。

本市最北の金峰山一帯には水晶鉱床が広がっており、近代には枯渇したものの、近世後期には多くの水晶を産出し、本市の宝飾研磨産業の礎となりました。こうした水晶鉱床の成因はほとんどが熱水鉱床であり、マグマから分離した揮発性成分などが超臨界状態となった熱水中に酸素や珪素が含まれることで形成されたものです。そのため、マグマが固まってできた当該地域の花崗岩の中には多くの水晶が存在しているのです。

甲府盆地の中央部では、この北部山地を構成する固い岩石が地中深くに沈み込んでいます。

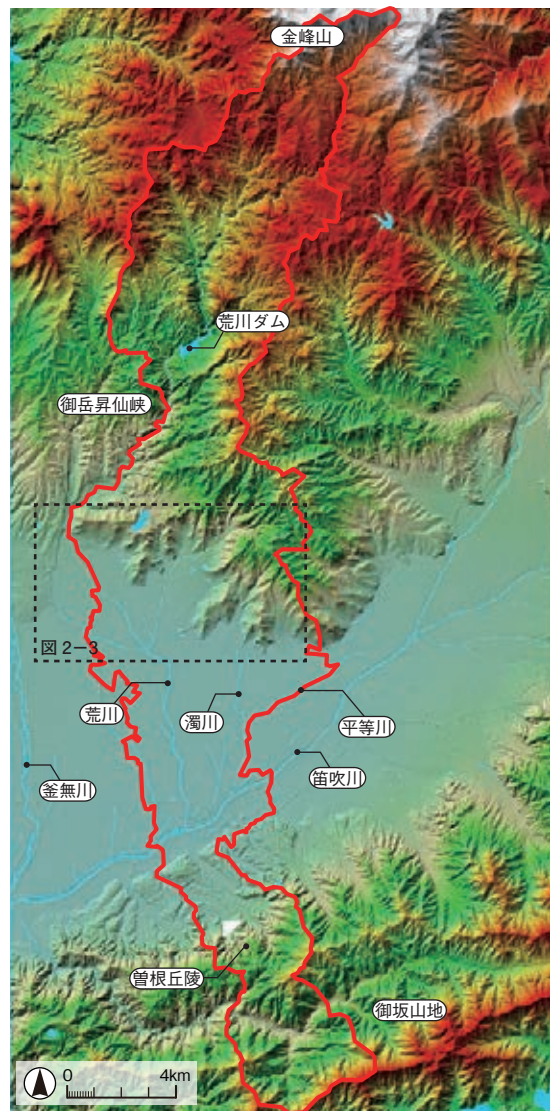


図 2-2 甲府市周辺の地形

その上に、30万年前八ヶ岳の一部が崩壊・流出した葦崎岩屑流の堆積物、また笛吹川・荒川などの河川が運搬した砂や泥なども厚く堆積し、人々の生活の舞台となる、平坦な中央低地の地形面を形成しました。

南部の山地は、甲府盆地南縁にあたる曾根丘陵は盆地底の堆積物と同じ砂泥礫層からできていますが、御坂山地は一転して1,200万年～1,700万年前に堆積した泥岩と、海底火山噴出物の溶岩・火山砕屑岩、及び石英閃緑岩を主とした深成岩類から構成されています。

市街地付近に目を向けると、北部山地と中央低地との接点には、富士川水系の河川によって形成された多数の扇状地がみられます。市域にあるのは、片山南西麓を扇頂とする荒川扇状地、積翠寺を扇頂とする相川扇状地、そして善光寺がある高倉川扇状地です（図2-3）。これらはいずれも南に傾斜する日当たりの良い緩斜面を形成し、戦国時代の城下町をはじめ、長らく人々の生活の舞台となってきました。

また、愛宕山の南西に伸びる尾根の先には一条小山があります。標高は302mで周囲との比高は30mほどですが、平坦な中央低地の中では孤立した山として目立つ存在です。そのため、ここには武田時代に砦が築かれ、のちに甲府城が築城されました。

なお、市街地北部の山麓には近世から複数の石切り場が存在し、甲府城築城にあたっても用いられたとされます。現在も山の手沿いには多くの石材店が立地しています（図2-4）。

(2) 水系

本市は、北部山地を水源とする荒川、市街地の生活排水を水源とする濁川という2つの主要河川が南北に貫流し、これらが市南部の旧中道町付近でそれぞれ笛吹川に合流し、のちに富士川に合流します（図2-2）。

これらの河川及び多くの小河川は、甲府盆地の地形に規定され、流路を形成しています（図

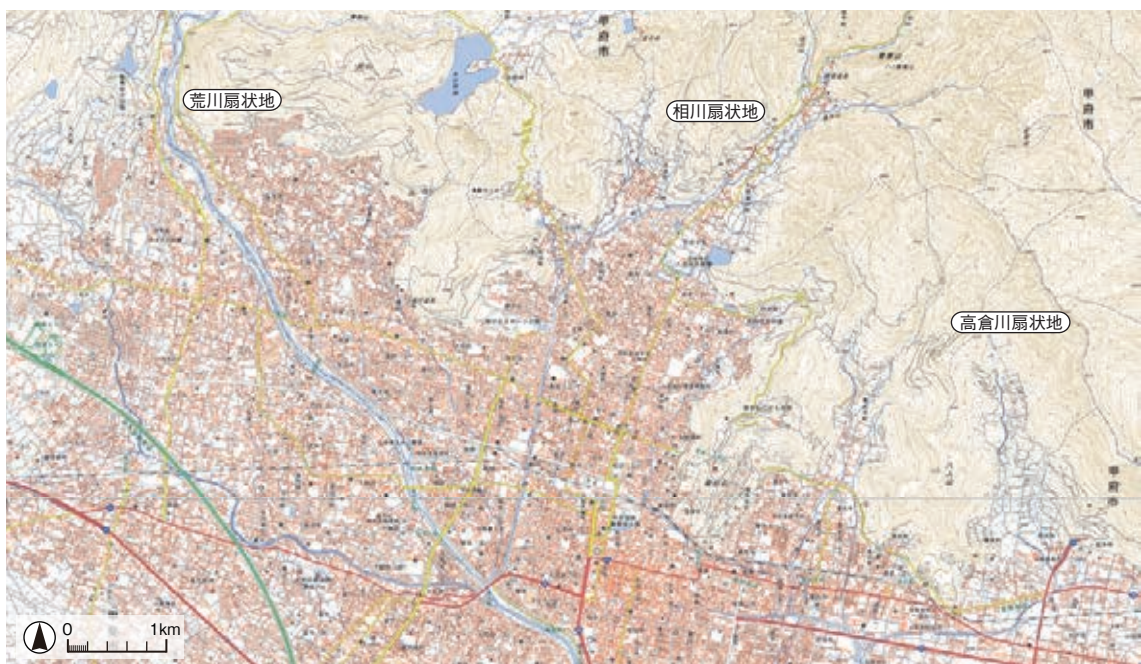


図2-3 市街地北部の扇状地

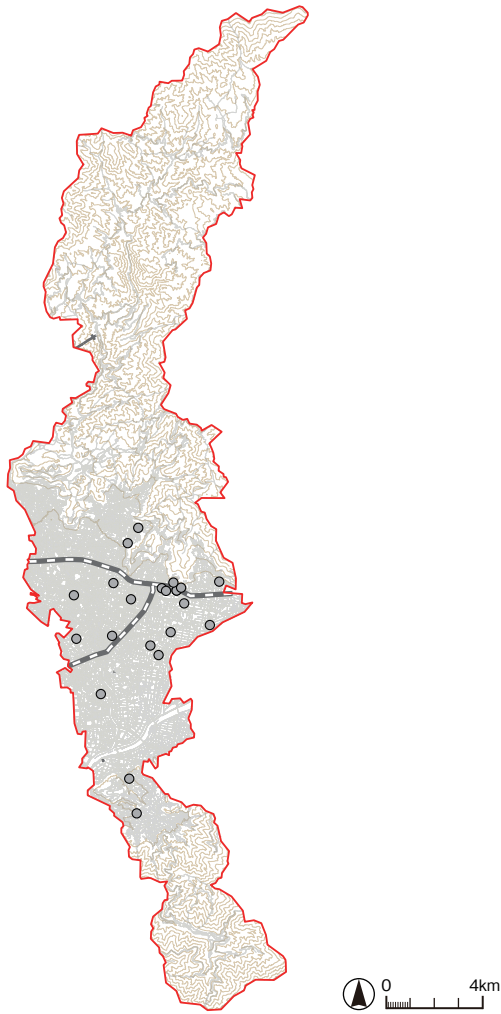


図 2-4 甲府市内における石材店の分布

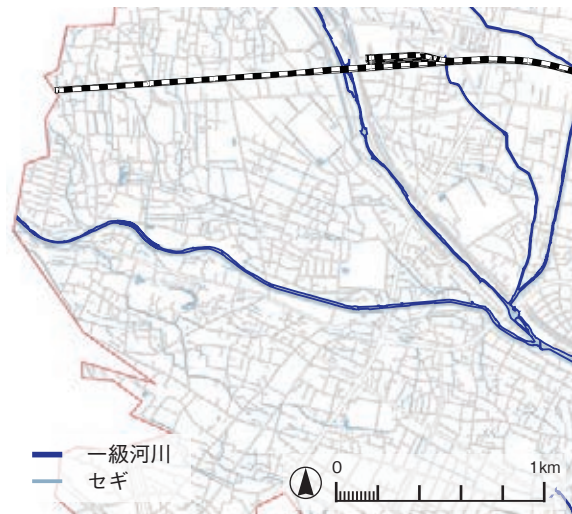


図 2-5 セギの広がり (新田・貢川周辺の例)



図 2-6 御所セギ (下積翠寺町)

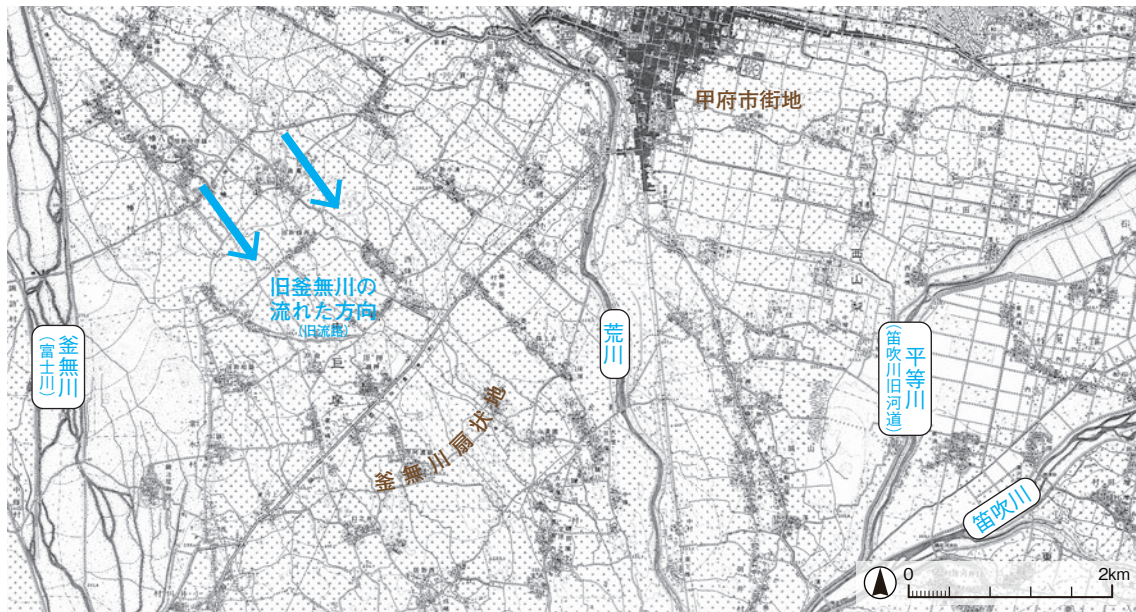


図 2-7 甲府市中心部の水系と地形

2-7)。地形的な特徴が荒川西側・東側で異なり、西側は南東方向、東側は南あるいは南西方向に向かって緩やかに傾斜していることから、甲斐市竜王付近から南東方向に流れた氾濫水は荒川に集まりました。

さて、甲府盆地ではセギ（図2-5・6）と呼ばれる水路が張り巡らされ、河川からセギに引き込まれた水は農業用水、生活用水として利用されてきました。こうしたセギの一部は市内において現在も一部は農業用水等に利用されています。江戸時代前期に、飲用・生活用・防火などを目的として甲府城下町に造られた上水道である「甲府上水」も荒川などから取水されたものです。

こうしたセギ、あるいは小河川について、明治期の旧版地図では、甲斐市竜王付近を頂点として南東方向に多く広がり、甲府市富竹・徳行・上石田・国母周辺（貢川以南）にまで広がります。こうした水系沿いに水田が拓かれ、水路間の高まりの上には細長く集落や桑畑が分布し、縞状を呈しています。

また、河川は盆地内でも低地にあたる甲府市街地南側の一帯を中心に多くの水害も引き起こしてきました。昭和61年（1986）には、洪水調節と上水確保を目的に、荒川上流の御岳昇仙峡付近（高町・川窪町）に荒川ダムが築造され、水害の防止と飲用水確保の両面で市民の生活を支えています。

このように、甲府盆地の地形のなかで形成された大小様々の水系は、甲府市街地の生活に深く影響を及ぼしてきました。

(3) 気候

市内の気候は、市街地と北部・南部の山地では様相が異なります。

市街地は内陸性の盆地気候で、昼夜及び季節の気温差が大きい、降水量が少ない、日照時間も長いことなどが特徴です。

夏季の暑さは全国有数であり、令和3年（2021）の場合、最高気温25℃を越える夏日は年46日に達しています。年間で最も高い8月の平均気温27.0℃、同年の最高気温は37.7℃（8月5日）でした。なお、これまでの最高気温は、平成25年（2013）8月10日に記録した40.7℃です。

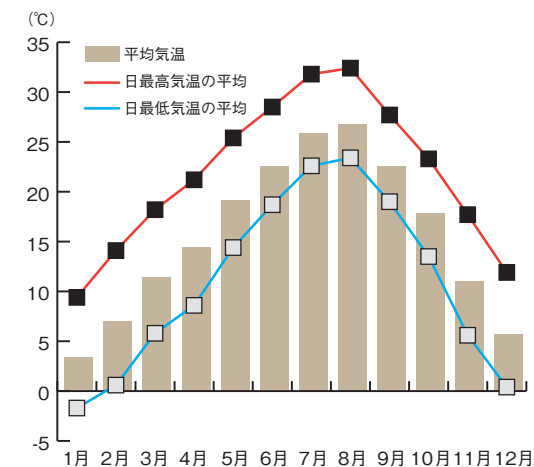


図2-8 観測地点「甲府」の平均気温 (令和3年)

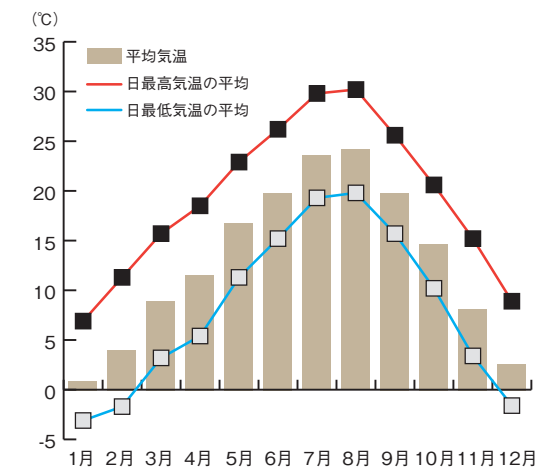


図2-9 観測地点「古関」の平均気温 (令和3年)

しかし、こうした暑さも秋の訪れとともに急速に和らぎ、10月には平均気温が10℃台前半まで下がります(図2-8)。寒暖差の大きい気象条件は、ブドウ等の果樹に糖度をもたらすことから、本市を含む甲府盆地一帯における果樹栽培の発展にもつながっています。

他方、北部・南部は、市街地に比べて涼しく、降水量も多めです。例えば、南部の「古閑」の令和3年(2021)の記録では、夏日は年18日にとどまり、8月の平均気温も24.0℃と、市街地に比べて3℃程度低くなっています(図2-9)。

(4) 温泉

本市の温泉としては、旅館街を形成する湯村温泉が有名で、市内有数の観光資源として毎年多くの観光客を迎えています。それ以外にも多くの温泉があります。

甲府盆地北縁の明野(北杜市)－湯村－石和(笛吹市)にわたる破碎帯(断層)の存在が指摘されており、この断層の発達域と温泉の分布域はほぼ一致しています。

また、温泉を成因で分類すると、現在活動する火山の熱水が地表まで移動する火山性温泉と、断層周辺を移動する地下水が地熱によって加熱されて温泉になるという非火山性温泉に分けられますが、湯村温泉をはじめとする甲府盆地北部の温泉はこのうち非火山性温泉と考えられています。

源泉数は市中心部の甲府温泉で54ヶ所、湯村温泉で24ヶ所を誇ります。また、これ以外にも積翠寺温泉(現在、入浴施設は廃業)や北部甲府温泉等があります。湧き出した温泉は、旅館のほか、様々な入浴施設に引き込まれており、市内のほぼすべての銭湯が温泉を用いていることも甲府市の特徴です(図2-10)。

甲府温泉の泉質は単純温泉、カルシウム・ナトリウム－硫酸塩泉、ナトリウム－塩化物・炭酸水素塩泉、湯村温泉の泉質はナトリウム・マグネシウム・カルシウム－塩化物泉、含硫黄－ナトリウム－塩化物泉、積翠寺温泉はアルカリ性単純温泉、北部甲府温泉(山宮温泉など)はナトリウム－塩化物泉と、地域ごとに異なります。また、泉温も、湯村温泉が30～49℃と最も高く、甲府温泉が26～47℃、その他の温泉は15～28℃です。

(5) 甲府における水害

荒川、笛吹川という2つの大きな河川に挟ま

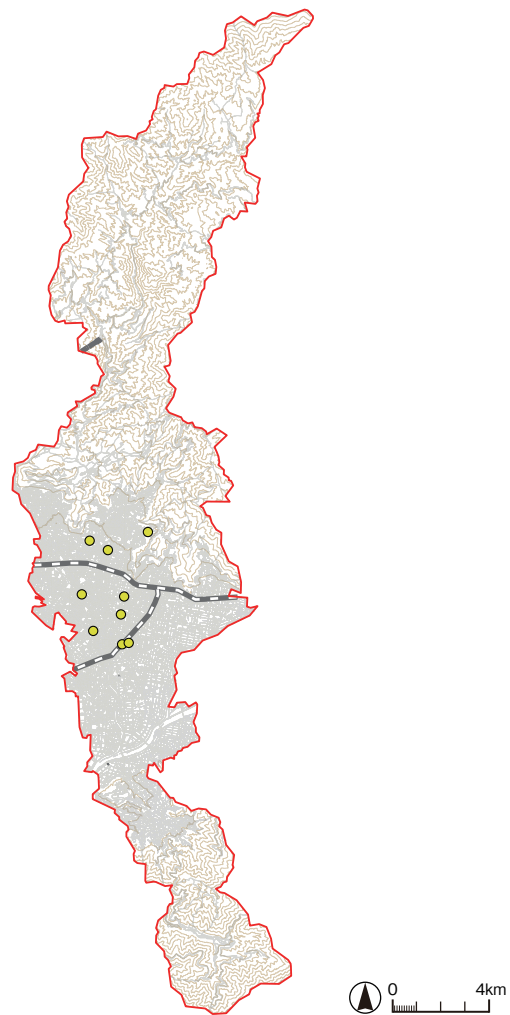


図2-10 甲府市内における温泉銭湯の分布

れた市街地は度々水害に見舞われてきました。こうした水害の要因として、甲府盆地の河川は周辺の山からの土砂運搬量が多く、盆地内で水流速度が低下することから、河川の合流地点に大量の土砂が堆積し、河床が高くなってしまうことも指摘されています。

近代以降でも、明治40年（1907）、明治43年（1910）、昭和34年（1959）に大規模な水害が発生しています。

こうした近代の水害発生については人為的な原因も指摘されています。つまり、明治14年（1881）に県の山林面積の3分の2に及ぶ面積（約35万町歩）が官有林に編入され、住民の森林への入会権が制限されたこと、残された民有林で薪炭の需要が増加し、急激な伐採で荒廃が進んだこと、さらに、明治29年（1896）の河川法制定により河川整備の補助金が限定的となり、治水事業が進まなかったことなどです。

こうしたなかで、平等川と濁川の合流点付近では、河床の浚渫、排水機場の整備などが進められ、笛吹川まで背割堤を設けるなどの対策が取られてきました。

また、明治時代の複数の水害によって荒廃してしまった山梨県内の山林に対し、明治天皇から県内の入会御料地が県有財産として下賜されました。舞鶴城公園（甲府城跡（国史跡））内にある謝恩碑（伊東忠太設計、山縣有朋揮毫、大正9年（1920年））は、これに対する感謝と水害の教訓を伝えるために建立されたものです。

なお、こうした水害も影響し、標高の低い市街地南部では、市内の他地域と比べ、石造物等の文化財の分布が少ないことが指摘できます。

3. 歴史的基盤

(1) 原始・古代

市内では縄文時代の遺跡や遺物散布地もみられますが、極めて限定的です。ただし、中道地区の後呂遺跡（右左口町）出土の人面装飾付深鉢形土器は、日本遺産「星降る中部高地の縄文世界～数千年をさかのぼる黒曜石鉾山と縄文人に会う旅～」（平成30年（2018）認定）の構成文化財となっており、山梨県から長野県にかけての縄文文化を代表する遺物といえます。

弥生時代になると、低湿地に集落が営まれ、盆地底部の開発が始まりました。また、市内の遺跡や散布地の分布をみると、古墳時代以降のものが多数を占めます。



図2-11 舞鶴城公園に建てられた謝恩碑



図2-12 舞鶴城公園における古墳分布

弥生時代から古墳時代にかけて、中道地区の曾根丘陵一帯には方形周溝墓群や多くの古墳（特に前方後円墳）が造られ（図2-12）、甲斐国の政治・文化の中心であったことがみてとれます。また、古墳時代後期になると、市街地北部の千塚・湯村、横根・桜井周辺に円墳や積石塚古墳が多く造られました。

平安時代末には武田信義が甲斐源氏を統率することで甲斐国の支配を固めますが、市域には信義の子である一条忠頼と板垣兼信が館を構えました。源氏挙兵にも参加して活躍することで、鎌倉幕府の成立にも貢献したとされます。

(2) 中世

甲斐守護であった武田信昌（信玄の曾祖父）が市東部に川田館を造り、信虎（信玄の父）はここを本拠に甲斐の統一を進めます。そして、永正16年（1519）に躑躅が崎に新たな館（武田氏館跡（国史跡）（図2-13））を築いて、移り住みました。市街地の山の手に位置し、三方を山に囲まれた相川扇状地の開口部で、南に甲府盆地を一望する場所です。さらに、館の完成した翌年には、館の北東2kmに要害城が築かれました。これにより、居館と府中を防衛する山城が完成しました。これが、甲斐の府中「甲府」の始まりになります。

武田氏の勢力拡大によって、「甲府」は東国有数の城下町に発展しました。特に、天文10年（1541）に武田信玄が国主になると、信玄は水害から甲府盆地を守る大規模な河川堤防「信玄堤」の建設、領国統治のための法律「甲州法度之次第」の制定、信濃善光寺の甲府移設によ



図2-13 武田氏館跡（国史跡／整備状況）

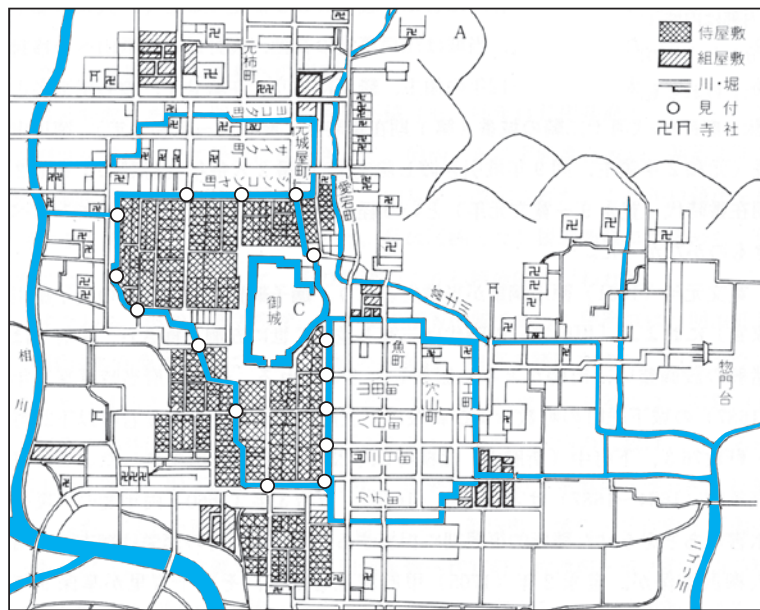


図2-14 近世における甲府城下町

る城下町の拡大等を通じて、甲斐国の政治的・文化的な発展と安定に貢献しました。

しかし、天正10年（1582）に徳川家康とともに織田信長が武田勝頼の領国に侵攻した甲州征伐により、武田氏は滅ぶことになりました。

(3) 近世

豊臣秀吉配下の浅野長政・幸長父子などによって、一条小山に甲府城が築城され、その周辺に近世の甲府城下町が建設されました。完成は、慶長5年（1600）頃と伝えられています。武田氏によって形成された古府中に対して、新たに形成されたエリアは新府中とされます。

甲府城下町（図2-14）が最も繁栄したのが、18世紀初頭の柳沢氏の時代です。それまで甲府城主は徳川家一門に限られていましたが、将軍綱吉の側近柳沢吉保が甲斐を受封して城主となり、子の吉里とともに父子二代にわたって城下町の整備が進められました。

その後、甲斐は幕府の直轄地となり、甲府城には勤番支配が置かれ、幕末を迎えます。

このように、近世の甲府は、幕府・徳川家との深い関わりのなかで、幕府の関東における支配の拠点として発展を遂げてきました。

(4) 近代・戦前

明治22年（1889）に甲府にも市制が施行され、「甲府市」が誕生します（本章4（1）参照）。

近世城下町であったエリアを中心に、近世の格子状の街区を受け継ぎながら形成された、官庁街、金融街、商業地域が混在する現在の中心市街地の姿の原形ができてきます。舞鶴通りを都心軸に、近世の統治の中核であった甲府城と近代以降の政治の中心である山梨県庁が通りを挟んで並んでいることも都市における時代の重層性を感じさせます。

明治6年（1873）～明治20年（1887）に山梨県権令、山梨県令、山梨県知事を務めた藤村紫朗は、製糸、葡萄酒醸造などによる殖産興業を推進し、甲府城跡にも勸業製糸場、葡萄酒醸造所などを設けたほか、都心軸とした舞鶴通りに沿って洋風建築を配すなど、近代都市の姿を具現化させていきました。現在も残る「山梨県庁舎別館（旧本館）及び県議会議事堂」（県有形、図4-11）はそのひとつです。また、藤村の指導による擬洋風建築である「藤村式建築」の建物も県内各所に多く建てられました。藤村が学校教育を重視したこともあり、学校建築で特に多く見

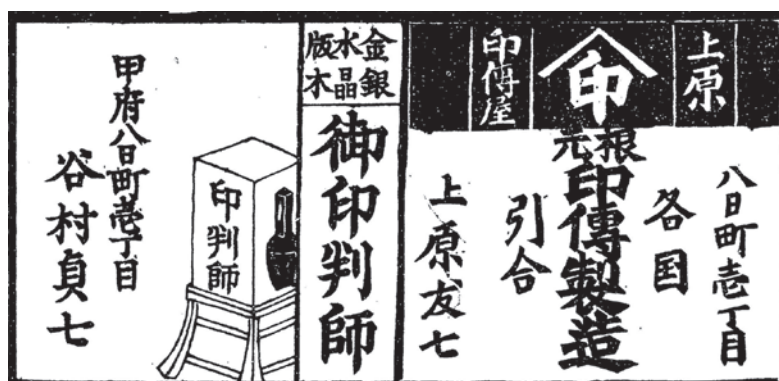


図2-16 「山梨甲府各家商工便覧」（1885）にみえる店舗紹介記事

られます。中巨摩郡敷島町（現在の甲斐市）から武田神社境内へ移築ののち、現在は甲府駅北口広場に再移築された「旧睦沢学校校舎」（国重文、図2-25）も藤村式建築の代表例といえます。

さて、『山梨甲府各家商業便覧』（1885）（図2-16）、『甲府買物独案内』（1872）などからは甲府に多様な業種の商店が軒を連ねていた様子を見ることができます。こうした近代の甲府について、新婚時代を甲府で過ごした太宰治は「シルクハットを倒さまにして底に小旗を立てたような、文化のしみとおったハイカラなまち」（『愛と美について』（1939））と記しています。

さらに、明治36年（1903）には中央線が甲府まで延伸し、甲府－東京間が鉄道で結ばれることになりました。これにより、人・物資の移動が一層盛んになり、また、御岳昇仙峡などの観光資源化も加速します。観光地としての山梨／甲府の芽生えです。

一方で、近代化のなかで発展を遂げてきた甲府は、軍都としての側面も有していました。

明治38年（1905）には大日本帝国陸軍歩兵第49連隊が置かれ、市街地には兵舎、陸軍病院などが設けられました。また、潜水艦のソナー（水中聴音機）製造に必要なロッシェル塩の原材料となる酒石酸は、葡萄酒製造時に抽出されるもので、サドヤ醸造場が国内で唯一製造可能な場所でした。戦時下には、全国のワイン醸造場から粗酒石がサドヤ醸造場に集められました。ワイン醸造も軍需産業であったのです。さらに、戦時下に紡績工場から転じた兵器工場もあるなど、米軍による戦略的な攻撃につながる施設が多く立地していたのです。

そのため、第2次世界大戦中の昭和20年（1945）7月には空襲を受けることになります。市域の74%を焦土と化し、甲府のまちの姿の多くが失われてしまいました。当時の市域の全戸数25,898戸のうち、およそ3分の2にあたる18,094戸（全焼17,864戸、半焼230戸）が空襲を受け、1,127人の死者を出す惨事となりました。

市内には第2次世界大戦に関する多くの慰霊碑が受け継がれているほか、歩兵第49連隊に関する遺構、また、戦後に唯一残された旧糧秣庫赤レンガ倉庫（国登録、現・山梨大学赤レンガ館）など、軍都としての歴史を伝える文化財もあります。

（5）戦後・現代

終戦翌月にあたる昭和20年（1945）9月に本市は戦災復興局を設置し、戦後復興に向けた歩みを加速させます。そのなかでは、戦災復興事業として甲府駅南口から南に延びていた都市計画道路（駅前通り）が拡幅され、平和通りと名付けられました。平和通りは現在でも中心市街地から甲府バイパスへ至る市内の基幹道路として、地域の生活を支えています。

また、昭和43年（1968）には県内外の有志の寄付により武田信玄公銅像（宮地寅彦作）の制作が開始され、昭和44年（1969）に甲府駅前に設置されました（昭和60年（1985）に現在の場所に移設）。この銅像は、甲府あるいは山梨の象徴的なイメージとして根付いています。さらに、昭和45年（1970）には、春の風物詩ともなっているイベント「信玄公祭り」が開始され、現在も武田信玄の命日（4月12日）の前の金～日曜に開催されています。

なお、昭和46年（1971）には甲府バイパスが開通し、昭和57年（1982）には中央自動車道（勝沼IC.～甲府昭和IC.）も完成します。

このように高度経済成長期には、モータリゼーションの進展や道路整備等に伴って、武田信

玄のイメージのなかで、甲府が首都圏近郊の観光地として大きく成長した時期でもありました。他方、店舗等の郊外出店も加速し、中心市街地の空洞化も進むこととなりました。こうした課題は現在の甲府にもつながるものです。

平成元年（1989）には市制100年を迎え、平成18年（2006）には中道町及び上九一色村北部地域と合併し、新「甲府市」が誕生しました。平成31年（2019）には中核市に移行し、行政機能の強化が図られ、ますますの発展を遂げています。

また、令和元年（2019）にはこうふ開府500年、令和3年（2021）には信玄公生誕500年を迎え、市を挙げたイベントが継続的におこなわれるなど、市内の歴史文化、また、文化財を活かしたまちづくりを積極的に推進しています。

(6) 土地利用の変遷

図2-17は、市域を中心とした盆地内における土地利用について、近代以降の遷り変わりを示しています。

①市街地の変遷

戦前の市街地は、現在の中心市街地周辺（中世・近世城下町とその周辺）のみで、多くは農地を中心とする農村地帯でした（②参照）。北部（中世城下町北側）は山麓にあたることから市街地が拡大する余地はなく、戦後の拡大は、主として南西方向に拡大していきました。市街地の拡大は続き、1990年代以降、市域については、東部及び南部の一部を除く大部分のエリアが市街地となっており、そうした地域では農地の宅地転用も進んでいます。

②農地の変遷

明治時代前半にはそのほとんどが水田でした。それが、明治時代の終わり頃になると、殖産興業の影響によって甲府盆地でも養蚕業・製糸業等が盛んになるなかで、水田の一部は桑畑に転換し、また、盆地を囲む山々の斜面地も含め、それまで水田となっていなかった土地も桑畑として開墾されました。桑畑は山側に向かって広がっていき、平成のはじめ頃までは、中道地区を中心に桑栽培がおこなわれてきました。他方で、養蚕の衰退に伴って桑畑も縮小し、平坦地では宅地化のほか、一部では水田への転換が進みました。また、中道地区の曾根丘陵周辺では、谷部に水田、丘陵部に畑地が形成されました。こうした畑では、現在、モモなどの果樹栽培に加えて、トウモロコシ栽培も盛んです。

また、市街地北東部の山の斜面、扇状地に目を転じると、明治時代の終わり頃から次第に果樹園が拡大し、昭和45年（1970）頃になると、峡東地域（笛吹市・山梨市・甲州市を含む甲府盆地東側の地域）で、ブドウ・モモを中心とした県内有数の果樹園地帯の西端が甲府市域（濁川以西）にも入り込んできています。戦前の果樹園地帯は善光寺付近から北側の斜面にかけて形成され、善光寺の門前には参詣者を主たる顧客とした多くの観光ブドウ園が並ぶことで、「甲府葡萄郷」と称するエリアを形成してきました。そうしたブドウ栽培のエリアが次第に拡大し、東側の峡東地域から拡大してきた果樹園地帯と結合することで戦後から現在に至る甲府盆地東側の一大果樹園地帯が形成されたとみることができます。現在、市内には4ヶ所のワイナリーがあり、また戦前から続く観光ブドウ園も善光寺界隈を中心に複数営まれています。ただし、

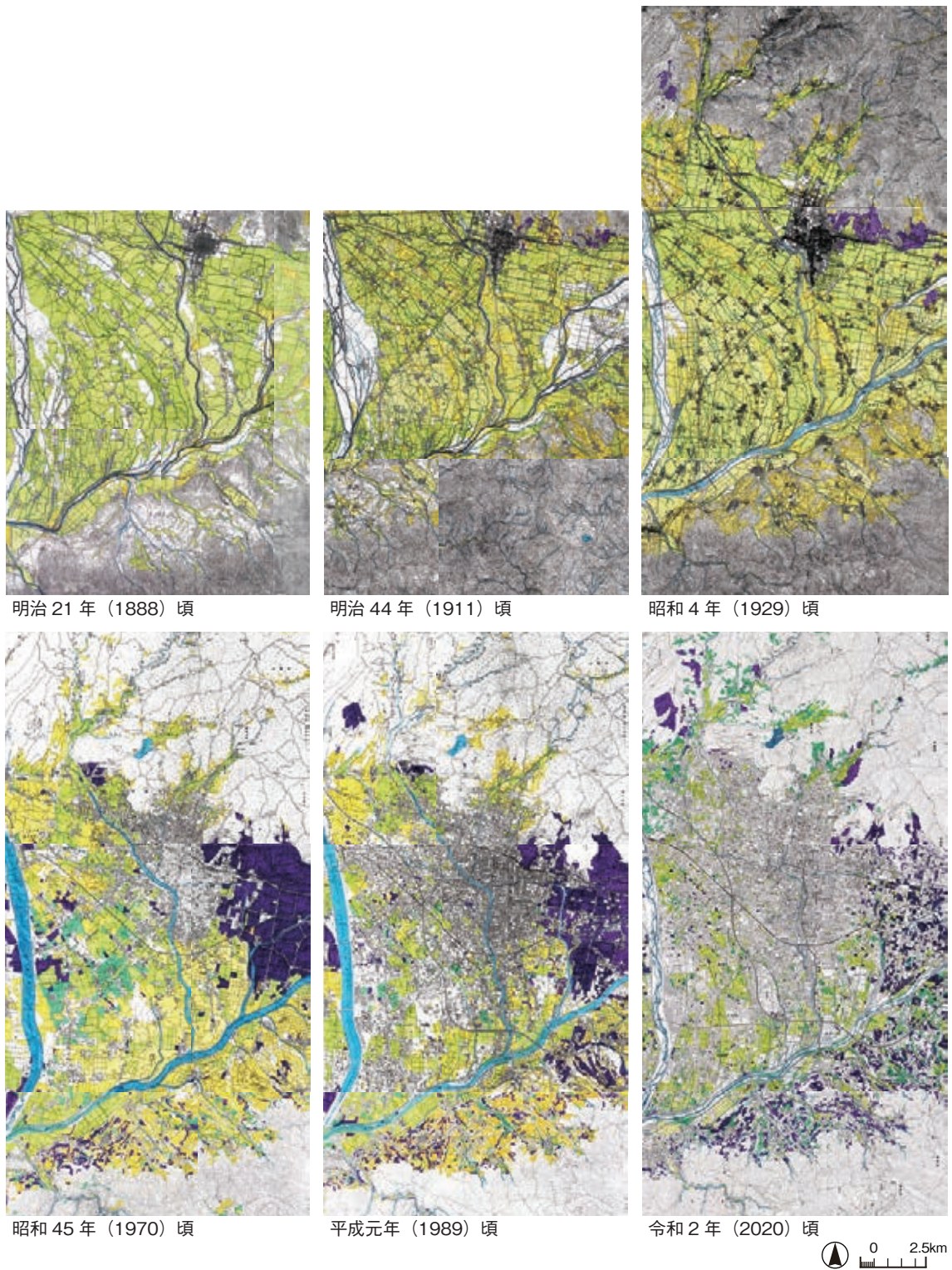


図 2 - 17 近代以降の土地利用変遷
黄緑：田 緑：畑地 黄色：桑畑 紫：樹園地

こうした東部の果樹園地帯も、2000年代以降、畑地の宅地転用が進み、宅地の中に畑地が点在する景観へと変わりつつあります。

現在の市域の景観は、こうした近代以降の土地利用変遷のなかで形成されたものです。そして、土地利用の歴史は、地域の生活文化や農業を中心とした基幹産業の遷り変わりとも深く結びついています。

4. 社会的基盤

(1) 行政区域・人口の変遷

本市の始まりは明治22年(1889)7月1日の市制施行にさかのぼります。市制施行時の市域は、現在の中心市街地(旧城下町)を中心としたエリアのみでした。

その後、5次にわたって周辺町村を編入し、市域を拡大してきました(図2-18)。

昭和12年(1937)	西山梨郡相川村・里垣村、中巨摩郡国母村・貢川村
昭和17年(1942)	西山梨郡千塚村・大宮村
昭和24年(1949)	中巨摩郡池田村
昭和29年(1954)	西山梨郡甲運村・能泉村・千代田村・山城村・住吉村・朝井村・玉諸村、 中巨摩郡大鎌田村・二川村・宮本村
平成18年(2006)	東八代郡中道町および西八代郡上九一色村北部(大字古関・梯)

特に、平成18年(2006)の旧中道町及び上九一色村(一部)の編入では、甲斐風土記の丘として整備され、古墳等の遺跡が多く立地する曾根丘陵が甲府市に含まれることとなり、市の文化財保護行政、また市域の文化財マネジメントという観点からも重要な意味をもっています。

また、令和4年(2022)4月1日現在の人口は185,751人、世帯数は92,368世帯となっています。

そして、市の総人口・世帯数の変遷及び将来予測を示したものが図2-19です。ほかの多くの自治体と同様に、高度経済成長期までは総人口、世帯数ともに増加の一途をたどってきましたが、1990年代以降、総人口は緩やかな減少へと転じています。また、核家族化、少子高齢化等の要因により世帯数は増加の一途をたどる一方で、世帯あたりの人数は減少しています。

市の将来人口は、国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、2035年に163,172人、2045年に146,591人になると予測されており、人口の減少傾向は一層加速していくことが推測されます(『日本の地域別将来推計人口(平成30年(2018)推計)』)。こ

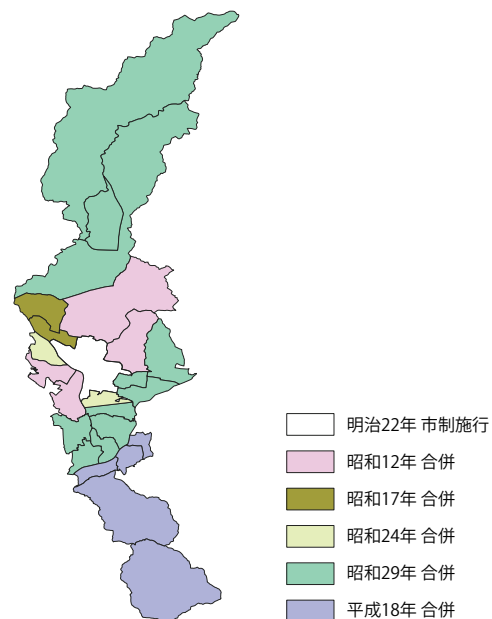


図2-18 甲府市の市町村合併と行政界の変遷

うした人口減が文化財、特に祭礼や伝統芸能等の無形の文化財の継承に対して深刻な影響を及ぼしていることはいうまでもありません。

(2) 市内の産業

①産業の全体像

本市の産業別人口は図2-21に示すとおり、第3次産業が全体の7割程度を占めています。市街地南部から隣接する昭和町にかけては多くの工場が立地していることもあり、第3次産業のなかでも製造業の割合が高くなっています。また、甲府盆地の中心都市であることから、卸売業・小売業の割合も高いです。

他方、第1次産業・第2次産業は、事業所数・従事者数ともに年々減少傾向にあります。甲府盆地は果樹栽培を中心に農業が盛んであるというイメージが広く根付いていますが、すでに「3. 歴史的基盤」で示したとおり、本市では、市南部の旧中道町域（稲作、果樹、トウモロコシなど）及び市街地北部の山裾及び東部地域（ブドウ）など、農業が盛んなエリアは限られています。そうしたなかで、農家数は、平成23年（2011）調査（農林業センサス）では2,400戸（うち、専業485、兼業806、自給的農家1,109）、平成27年（2015）調査（同）では2,088戸（うち、専業480、兼業635、自給的農家973）となっており、特に兼業農家の減少が深刻です。

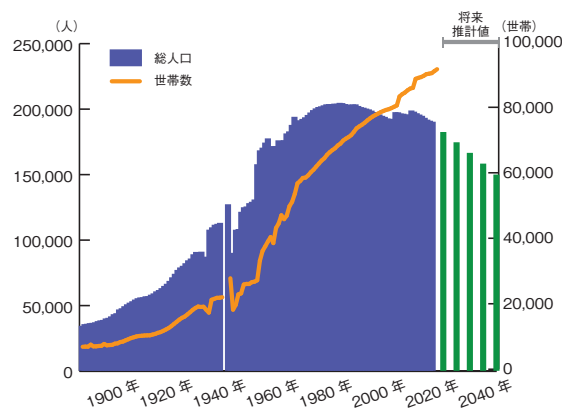


図2-19 甲府市の人口変遷と将来推計

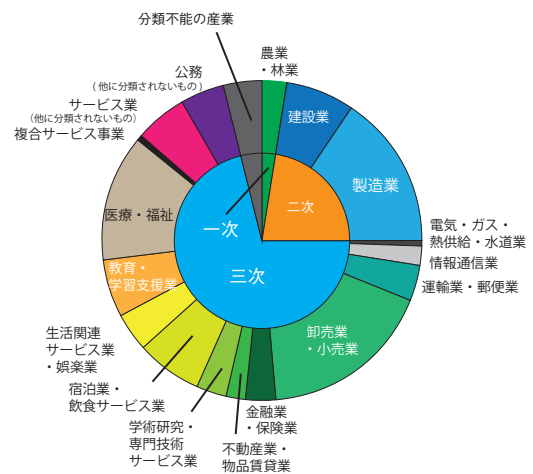


図2-21 甲府市における産業別人口構成(平成27年)

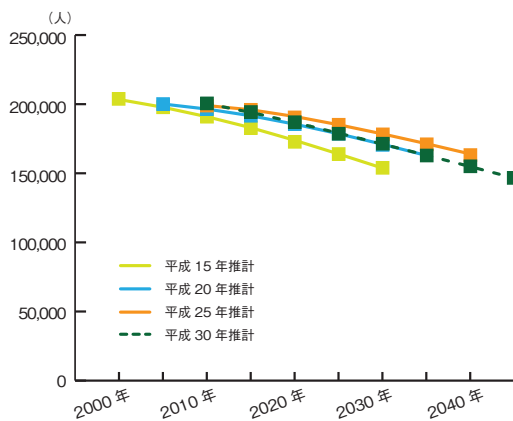


図2-20 甲府市の将来推計人口の推移

②宝飾・研磨産業等の地場産業

本市の産業を文化的な視点から考えるうえでは、宝飾・研磨産業は極めて重要です。「2. 自然的基盤」で指摘したように、市北部の金峰山地域には水晶鉱山が広がり、近世後期から本格的な水晶採掘がおこなわれ、当地に伝わった研磨・加工技術は甲府城下町にも広まりました。近代には山梨県産水晶は枯渇し、海外からの輸入品に転換していきしましたが、現在でも、市街地を中心に多くの宝飾研磨・加工業者や卸業者が立地し、世界有数の宝飾産業集積地帯となっています。例えば、平成30年(2018)の「工業統計調査」によれば、事業所数は山梨県内に94(全国247)、出荷額は山梨県内で260億円(全国1,390億円)となっており、事業所数では全国1位(2位は東京都内34)、出荷額では富山県の266億円と並んで全国トップクラスを誇っています。こうした県内事業所の多くは市内に所在していることから、本市における宝飾・研磨産業は、経済・文化両面において甲府の重要な産業といえます。

なお、市内では、甲州水晶貴石細工、甲州印伝が、伝統的工芸品産業の振興に関する法律に基づく「伝統的工芸品」(経済産業省)に、山梨貴宝石、親子だるまが山梨県による「郷土伝統工芸品」にそれぞれ指定されています。

(3) 交通

本市はもとより、山梨県は公共交通機関が十分に発達しているとはいいがたく、自家用車に依存した社会になっています。

主要な道路網は、東西方向には、中心市街地を貫く甲州道中(旧国道20号線、現在の国道411号(城東通り)及び国道52号(美術館通り))、また、中心市街地南側を通る国道20号線(甲府バイパス)がそれぞれ通っています。また、南北方向には、市中心部を平和通り(主として国道358号)が貫いており、甲府駅から南に延び、市南部の曾根丘陵からは山間部に入り、中道地区、上九一色地区を経て、精進湖に至ります。平和通りは戦災復興都市計画事業として整備されたものであり、現在は信玄公祭りの甲州軍団出陣におけるメイン会場としても有名です。

また、高速道路(中央自動車道)は、一宮御坂IC(笛吹市)から市南部の曾根丘陵方面へと向かい、甲府南ICへと至ります。その後、北西方面に進路を変え、甲府昭和ICを経て、長野方面へと向かいます。

一方、公共交通機関(鉄道・バス)による市内の交通網の状況は次のとおりです(図2-22)。

鉄道は、甲州道中に併行して、東京(新宿)－山梨－長野－愛知(名古屋)を結ぶ中央本線(JR東日本)が市街地を横貫しており、また、甲府駅からは富士・静岡方面に向けて身延線(JR東海)が運行されています。それぞれの路線で、特急列車として「あずさ」「かいじ」(中央本線)、「ふじかわ」(身延線)が運行されています。市内には、中央本線の駅として、酒折、甲府の2駅、身延線の駅として、甲斐住吉、南甲府、善光寺、^{かねて}金手、甲府の5駅(合計6駅)があります。このうち、甲府駅は、明治36年(1903)の中央線延伸とともに設置された、1日平均乗車人員14,246人(令和元年(2019))を誇る県内最大のターミナル駅です。駅構内には、甲府駅旧跨線橋柱や旧甲府駅煉瓦倉庫の一部を使用して造られたモニュメントなどが配置され、近代の鉄道

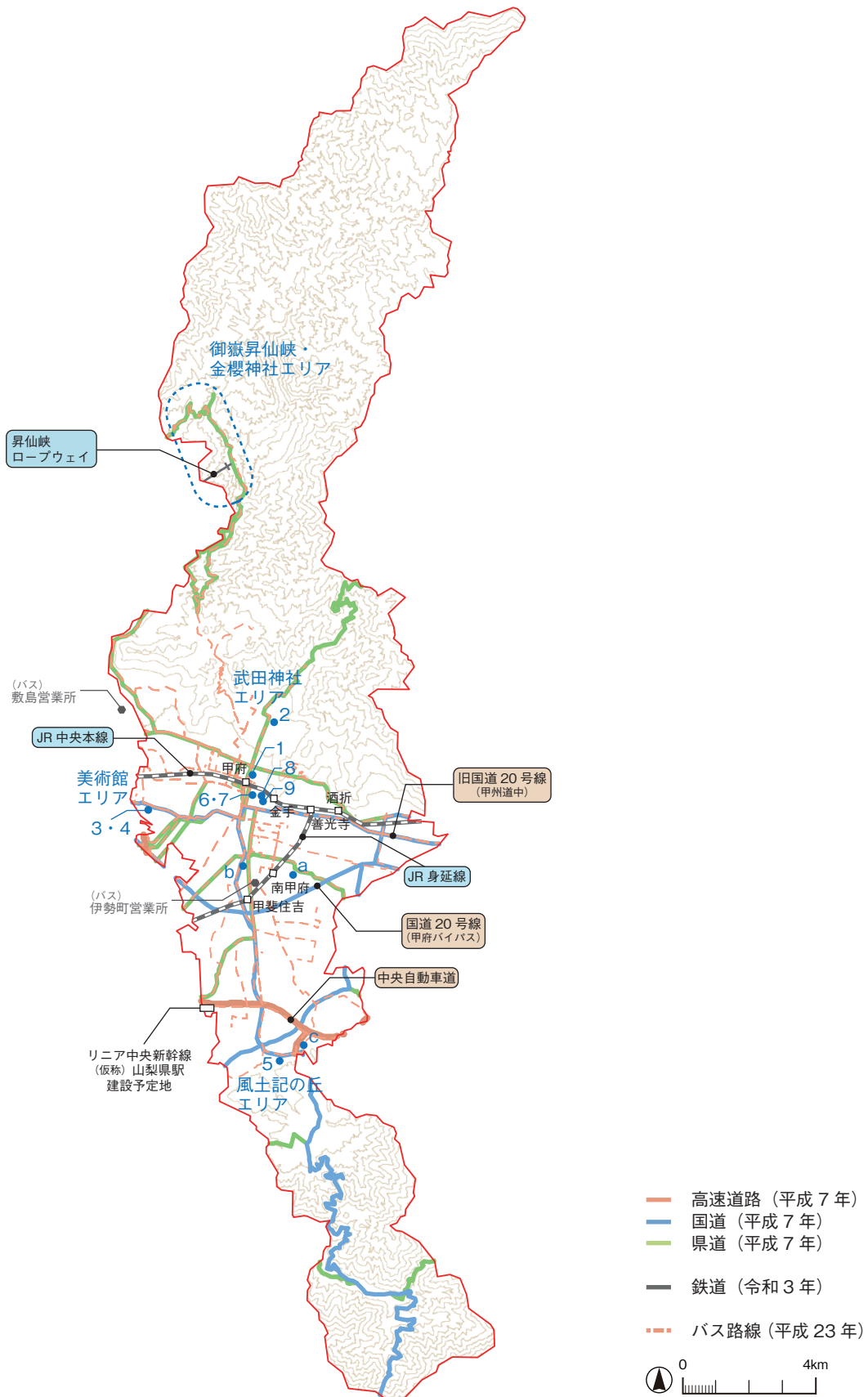


図2-22 公共交通機関による甲府市内の交通網 (図中の番号は表2-2・3に対応)

史を現在に伝えています。なお、昭和36年(1961)までは南西方面(終点は現在の南巨摩郡富士川町)に向けて山梨交通電車線(通称「ボロ電」)が走っていましたが、伊勢湾台風等の影響により廃線になっています。

また、乗合バスは、山梨交通株式会社を中心に市内各方面に運行されており、富士五湖方面からの一部路線では富士急バス株式会社の路線も乗り入れています。市内のバスの運行拠点としては、甲府駅のほかに、伊勢町営業所、甲斐市に接した敷島営業所があります。

東京・横浜方面へは、鉄道(特急列車)に加えて、甲府駅からの中央高速バスの利用も盛んで、特に東京(新宿)方面は、毎時2本程度が運行されています。

近い将来、リニア中央新幹線も本市を通過することになっており、市南部の大津町付近に(仮称)山梨県駅が設置される予定です。本市が策定した『甲府市リニア活用基本構想』(平成29年(2017)3月)では、リニアを活かしたまちづくりの目標として、「移住・定住の促進」「国際交流都市への構築」「産業振興の推進」「歴史物語都市への整備」「都市間連携の推進」の5つを掲げ、開通後の新たな地域づくりや市内交通ネットワークの整備の検討を進めています(図2-23)。さらに、付近には県最大級の展示場である「アイメッセ山梨」が立地しており、また、重要文化財「高室家住宅」もあることから、MICE*における文化財活用などの推進も期待されます。

* 企業等の会議(Meeting)、企業等の報奨・研修旅行(Incentive Travel)、国際機関・団体、学会等による国際会議(Convention)、展示会・見本市、イベント(Exhibition/Event)の頭文字を使った造語で、これらのビジネスイベントの総称。

(4) 観光地としての甲府

本市は、特別名勝にも指定されている御岳昇仙峡のほか、武田神社や甲府城跡などの文化財、さらにはジャン＝フランソワ・ミレーの絵画に関する世界有数のコレクションをもつ山梨県立美術館など、多くの観光資源に恵まれています。

直近の甲府市及び山梨県への観光入込客数は、平成30年(2018)4,272,839人(山梨県全体37,687,727人)、令和元年(2019)3,694,405人(山梨県全体34,645,512人)、令和2年(2020)2,003,153人(山梨県全体16,884,267人)となっており、令和2年以降は新型コロナウイルス感染症の影響で大きく落ち込んでいますが、毎年、山梨県の観光入込客数の1割が甲府市を訪れているという状況は変わらず、本市は観光立市という側面ももっています(図2-24)。そのため、図2

目 標	内 容	施 策
移住・定住の促進 国際交流都市への構築 産業振興の推進		
歴史物語都市への整備	リニア中央新幹線の開業を通じて、国内外の旅行者の飛躍的な増加が見込まれることから、本市の強みでもある古代・中世・近世の歴史資源の有効活用や魅力向上を図るとともに、市民や旅行者の学習達成感が満たされるよう、優秀な歴史総合案内の人材を育成する。	10 歴史資源の魅力向上 11 歴史資源の活用 12 歴史総合案内の人材育成
都市間連携の推進		

図2-23 リニアを活かしたまちづくりの方向(甲府市リニア活用基本構想)

－ 20に示した産業別人口においても、「宿泊業・飲食サービス業」が全体の1割程度に達しており、観光産業は市の重要な産業のひとつとなっています。

市内エリア別の観光入込客数をみると、「芸術の森・武田神社周辺」が際立って多く、全体の入込客数の2/3程度が訪れています（表2－1）。こうしたことから、本市の観光振興では、文化観光を重視していく必要性をみてとることができます。

こうしたなかで、近年のインバウンド急増等に支えられた国内の観光需要拡大に対して、本市における入込観光客数の成長はまだまだ十分な状況とはいえません。また、新型コロナウイルス感染症の拡大の影響により、その需要は大きく落ち込んでいます。

市内には、御岳昇仙峡エリア、武田神社エリア、中心市街地（甲府城跡（舞鶴城公園）周辺）、湯村温泉エリア、美術館エリア（芸術の森）など、歴史文化、文化財と深く結びついた観光エリアが多数あります。また、表2－2、図2－25・26に示すような文化財等の展示施

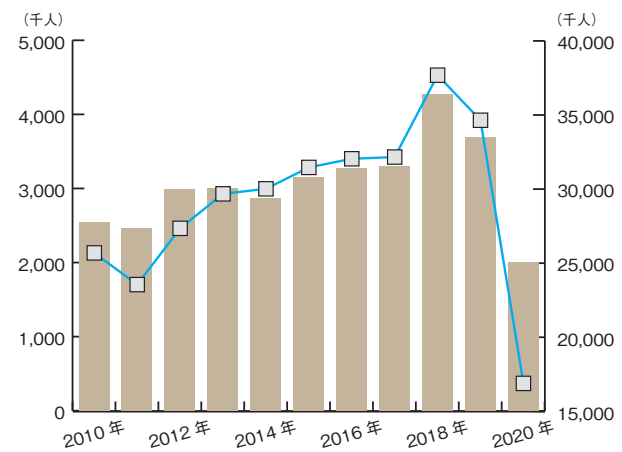


図2－24 甲府市及び山梨県の観光入込客数推移
(棒グラフ：甲府市、折れ線グラフ：山梨県)

表2－1 市内エリア別の観光入込客数

	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
昇仙峡・湯村温泉周辺	437,737	467,100	508,334	424,027	568,880	560,323	560,323	531,768	568,750	538,530	409,375
芸術の森・武田神社周辺	1,956,081	2,373,968	2,389,786	2,385,796	2,424,568	2,531,800	2,531,800	2,593,724	3,246,429	2,819,436	1,433,358
風土記の丘周辺	418,662	526,377	502,319	446,44	555,569	553,409	553,409	537,626	818,473	663,793	456,549

※「芸術の森」は山梨県立美術館・山梨県立文学館を含む公園である。

表2－2 市内の文化財等の展示施設

	所在地	開館年	管理運営	備考	
1	甲府市藤村記念館	甲府市北口2丁目2-1 (甲府駅北口広場)	2010	甲府市教育委員会	建物は国重文(移築)
2	甲府市武田氏館跡歴史館 (信玄ミュージアム)	甲府市大手3丁目1-14	2019	甲府市教育委員会	
3	山梨県立美術館	甲府市貢川1丁目4-27	1978	山梨県 指定管理:SPS・桔梗屋・KBS 共同事業体	
4	山梨県立文学館	甲府市貢川1丁目5-35	1989	山梨県 指定管理:SPS・桔梗屋・KBS 共同事業体	
5	山梨県立考古博物館	甲府市下曾根町923	1986	山梨県	
6	山梨近代人物館	甲府市丸の内1丁目6-1 (山梨県庁内)	2015	山梨県	
7	山梨県立宝石美術専門学校附属 ジュエリーミュージアム (山梨ジュエリーミュージアム)	甲府市丸の内1丁目6-1 (山梨県庁内)	2013	山梨県立宝石美術専門学校	
8	山梨中銀金融資料館	甲府市中央2丁目11-12	1992	株式会社山梨中央銀行	
9	印傳博物館	甲府市中央3丁目11-15	1999	株式会社印傳屋上原勇七	

※網掛けは市設置施設

設があり、地域の伝統工芸等を紹介する施設も複数あります。

また、農業が盛んなことから、市内では表2-3にあげる農産物直売施設に加え、モモ、ブドウ、イチゴ等の果樹を中心とする観光農園等も多数営まれています。あわせて、本市の資源や技術、「甲府らしさ」といった個性を活かした特産品や加工品などの優れた商品を「甲府ブランド」として認定し、「甲府之証」（こうふのあかし）認証マークを与え、甲府の良きモノとして日本中、世界中に発信していこうとする施策を推進しています（表2-4、図2-27）。

観光立市として、こうした観光資源の磨き上げと高付加価値化は急務であり、日本遺産「甲州の匠の源流・御嶽昇仙峡～水晶の鼓動が導いた信仰と技、そして先進技術へ～」に関する取組みや、本地域計画に基づく取組みを効果的に展開することで文化観光の推進を図り、新型コロナウイルス感染症からの観光回復、発展につながることを期待されます。



図2-25 藤村記念館



図2-26 甲府市武田氏館跡歴史館(信玄ミュージアム)

表2-3 市内の農産物直売施設

	所在地
a JA 全農やまなし農産物直売所 たべるんやまなし	甲府市青葉町 1421-1
b 甲州地どり市場	甲府市伊勢 2-10-2
c 風土記の丘農産物直売所	甲府市下曾根町 1070-3

表2-4 「甲府之証」認定品（農林産物部門）（令和4年6月現在）

	認定品	認定者	認定年
特選	ぶどう（シャインマスカット）		平成28年
	もも（なつっこ）		平成29年
	すもも（木成り甘熟大石早生）		令和元年
巧	もも（なつっこ）	柿嶋美保子	平成29年
	ぶどう（シャインマスカット）	河野功	平成29年
伝承	くいしき味噌		平成28年
特産	甲州地どり		平成28年
	甲州信玄豚		平成28年
	ちぢみほうれんそう		平成28年
	スイートコーン（ミルフィーユ）		平成28年
	スイートコーン（きみひめ）		平成28年
	なす（千両二号）		平成30年
	甲州乳酸菌豚クリスタルポーク		令和2年

※特選：系統出荷体制の中、光センサー糖度計測器により厳格に品質管理されたぶどう、桃などの逸品

※巧：個人出荷の農家の卓越した熟練の技術により生み出される逸品

※伝承：甲府にしかない伝承的農林産物、または、甲府で作出された農林産物

※特産：産地化され、市場評価も高く、既に全国で広く取引されているもの



図2-27 「甲府之証」認定マーク